

2 2 : 卵巢割拠雌牛へのテストステロン投与による発情発見牛作成の試み

臨床獣医学研究部門 松井 基純

メールアドレス mmatsui@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

ホルモン処置を施した牛を用いた発情牛発見効率の向上を目指す

【方法】

卵巢割拠済み未経産牛へ持続型テストステロン製剤を1回200mg、3日ごとに6回筋肉内投与し、観察対象牛郡と1ヶ月間同居させる。1日2回発情観察を行い、乗駕跡の確認およびホルモン処置牛と観察対象牛との行動の関係を調査する。また、観察対象牛に対して、通常の繁殖管理業務にのっとり、膣鏡検査および直腸検査により、発情診断を行う。

【結果】

テストステロン処置牛を牛群へ導入することにより、被乗駕頭数が有意に増加した(表参照)。また、テールペイントの剥がれの程度を4段階(1:完全消失、4:剥がれ無し)に分類し、乗駕の程度を評価した。その結果、発情およびその前日に、テールペイントの剥がれがみられた。さらに、処置牛を牛群に導入した場合、処置牛のいない場合に比べ、テールペイントの剥がれ具合が強くなったことが示された。以上のことから、テストステロン投与したウシを牛群内へ導入することで、発情発見の効率が改善されると考えられた。

	処置牛なし	処置牛あり
観察対象牛(頭)	33	39
被乗駕頭数(%)	6(18.2) ^a	19(48.7) ^b

a, b: p<0.05